

## エリアス・カネッティ「眩暈」のグロテスクな表現について (2)

中野 隆 正

前述したように、「眩暈」のなかではたいいていの登場人物が、話せば話すほど、その相手はほとんど耳を傾けないし、また話すことによって心と心が触れ合うこともない。そしてただ言葉によってお互い相手の神経を参らせ、相手を打ちのめすのである。ここでは言葉は他人に対する自己確認の道具であり、他人に対する境界設定の道具でしかない。話すということが、ここでは人と人との間を支配している「隔たり」を増すことに役立っている。登場人物はそれぞれ全体の相互作用が妨げられていることにすら気づいていないしそれがまたさらに各人を孤立へと追いやるのである。

このような孤立の例として、キーンの場合を見て行こう。ペーター・キーンは学者として紹介されている。彼は生涯を捧げた学問のために、自ら作った生活の規則によって、あらゆる日常生活の気を散らすものから、自らを守る。学問と真実とは、キーンにとって同一の概念であった。人間から遠ざかるほど真実に接近する。日常とは虚偽を浮動させるさざ波なのである。

彼の仕事も、自ら誇る十分、合理的に考えられた構想に添っていた。

※

「エーアリッヒ・シュトラッセ24番地の建物の最上4階にキーンの図書室はあった。扉は三重の複雑な鍵によって保護されていた。キーンは鍵をあけ、衣桁がひとつあるだけの玄関口を通り、書齋に入った。おずおずと鞆を脇掛椅子におき、次に図書室を形成している広大な、天井の高い通しの4部屋を検分する。壁全面は天井まで書巻で覆われていた。丹念に目をこらす。天窗がある。ここより入る明りはキーンの誇りであった。側面の窓は、数年前、家主とひと悶着起こしたあげく埋めこませた。その結果、どの部屋にも4番目の壁が書棚用に獲得された。上からの照明がくまなく棚を舐め、書巻をほどよくまさぐる。往来の雑踏を眺めるという欲望は——人が生まれながらに所持している暇つぶしの悪徳は——側面の窓の喪失とともに失われた。書卓に向かう前に、毎日、キーンは創案と徹底とを希求した。これを待って、始めて自分の願いが叶うもの。すなわち豊潤な蔵書、整然と完結した蔵書、その中には余計な家具一つだになく、余計なひと一人だにせず、ひたむきな思考に専心専念できるもの、これを持つことであった」<sup>1)</sup>。

※

キーンは学者であり、しかも学識を窮めた一流の学者である。学問というのは現実の我々の目の前にある対象を解明することに始まる。しかしその目標とするのは表面的なことではない。我々は理性を働かせ、より深く物を見ること、時を越えることに努める。つねに入れ替る日常世界の向う側には、変わらない、法則に則る、不滅の領域があり存在するすべての物がそれによって生じ、そして消えていく永

遠の法則の領域がある。

キーンはこの永遠の世界に順応していた。彼は現実の variability に対して書物でバリエーションを作って徹底して立籠った。その住いは本の要塞、巨大な船室と同じであり、その船室から、キーンという巨大な頭脳が上へと目ざしを向ける。それは無限への目ざしである。キーンが目ざすのは、非現実的なものへの道であり、抽象化への道である。

「運命を自分の手で操れるのは人間だけだ。」この言葉はこの世には他に師も所有者も居ないのだとする、あらゆる開けた学問のきまり文句である。ここではこのきまり文句が効果を上げる。しかし体験を通してこの言葉が生きてくるのではない。自己確認を手に入れる途方もない偏見として、この言葉が効果を上げるのである。

テレーゼは偽善、トリック、策略により、勤め始めてから8年後に、彼女の雇い主であるキーンと結婚してついに勝利を手に入れる。そのときキーンはこのテレーゼの勝利を簡単な文章の改作により、自分が前々から計画していた成果に変えてしまう。「女一般、あれこれあげつらうことは構わぬ。だが、見習期間をおかずに結婚に踏み切るのはその当人が馬鹿だと知れ。わたしはかくも賢明であった。四十歳になるまで待ったのだから。八年間の試験期間とは、まさしく他人の模範となるべきものであろう。来たるものを徐々にとらえる。運命をおのが手で操ることができるのは人間のみだ。」<sup>2)</sup>

このようにキーンは、自分の頭脳の尺度に合わせて物を考える。つまり彼にとって世間は「頭脳のなかの世界」としてのみ存在する。この作品の最後のタイトルがそうなっているように。

しかし現実がこうゆうぐあいには、個人によって、自分の頭脳の狭い尺度に従って刈りこまれると、もう現実が客観的な対称として現われてはこない。人が突き当たる障害、自分の限界を経験することができる妨害が、ここでは抜け落ちてしまう。とくにキーンがみじめに自分の要求を断念するので、我々は傍観者として、ここではこつけない効果を上げるキーンの思い上りを見るのである。

ここで「抜け落ちたものは文字どおり『経験』である。」<sup>3)</sup> 一生の間現実を避けてきたので、キーンは現実を真に経験することはなかった。悪魔払いをしたにもかかわらず、現実がのさばってくるころでは、彼は逃げ始める。彼が正当に評価しないので、現実はさらにあつかましくなる。もはや止まらない現実を前にしたこの逃避を、カネッティは茶番の領域にまで、そしてそれを越えた領域にまで導いていく。昼に結婚したテレーゼが、夕方挫折してベッドに横たわっているのに、キーンはズボンをずり下して便器に腰を掛け「赤子のように泣く」のである。女を前にした全能の思い上りは、ひっくり返って気の毒なインポテンツの図になる。おかしきは同情にまで高まっていく。

テレーゼを女として扱わないキーンの態度により、彼女はいたずらに女としての真価を求め、粗野な性的空想へと走る。そして住居や家具、金しか知らない、あき足りない主婦の役割を強られることにもなる。

こうして二人はキーンの住いで生死にかかわる争いを始める。

挫折した主婦が、自宅の図書室という本の要塞に家具を入れて囲むことにとりかかっている間、キーンの方は憎しみの対象である邪魔な家具を避け、それから身を守ろうとする。無視の理論を述べることによって。限りない混乱と妨害要因を持つ現実というものを、体でささえることができる人だけが、この混乱のなかに秩序を見出すのである。つまりキーンにとって無視が学問する上での重要な規定になっている。自分自身を失う可能性のある巨大な混乱として現実を把握した人は、精進への力を持つ無視と

いう防護を見出すのである。学問上の見解の前提となるしっかりした立場は、混乱を、つまりはてしないコントロールしえない変化を防ぐことによってのみ、獲得することができる。それゆえ学問にはとりわけ自己規律が必要となる。無視は誘惑に対する断固とした抵抗としての意志の問題である。学問と道義は同じものである。人間が運命を自分の手で操ろうとするなら、混乱のなかで我を忘れてはならない。

しかし、現実においてキーンはテレーゼのでしやばりから我が身を救う方法を知らなかったし、テレーゼの残忍な殴打——それによって彼は青黒いアザをこしらえていた——から逃れることはできなかった。妻の殴打のもとで彼は自らが石と化したのだと思いこむ。そして石と化せば妻は手を出せないと考えるのである。

けれども彼が石の偶像のように座りこんでいることがテレーゼを怒らせた。そして彼女は自分の住いから彼を追い出すのである。

※

「テレーゼは彼の頭を掴み、書卓に打ちつける。肋骨を腕で殴り、声をあげた。『あたしの家から出てお行き。』唾を吐く。顔めがけて唾を吐きかけた。キーンは感覚した。激痛が走った。ああ、石ではない。石ではなかった。崩解したのは妻ではなく、わたしの芸術であった。すべては偽りであった。信仰などはない。神などいない。わたしは退却する。身を守らねばならぬ。殴り返そう。さぞや命中するであろう。わたしの骨は鋭い、『あたし告訴する。盗人は牢獄行きよ。警察はなにもかも見通しだわ。盗人は牢獄行きよ。わたしの家から出てお行き。』妻は足を踏ん張る。わたしを転倒させるためだ。わたしが床に倒れれば妻の有利だ。先般、既に試しずみである。なに、そうはさせぬ。わたしは強い。このときテレーゼはキーンの襟首をとり、部屋から引きずり出した。音高くドアを閉じる。同時にキーンは床に崩れた。疲労——疲労のせいである。再びドアが開き、外套と帽子と鞆とが投げ出された『いくらたのんでも無駄よ。』と叫んで、テレーゼはドアを閉じた。鞆は与えたわ。だって、空だもの。本はみんなあたしのもの。

キーンは預金道帳をポケットに持っていた。（註・テレーゼはそれを探していた）そして通帳にすぎないにもかかわらず、嬉々としていとおしげにおさえた。乞食するのはだれのことか。妻はつゆ知らぬ。一体、おのがものを盗む盗人がどこにしよう？え、どこにしよう？」<sup>4)</sup>

※

ここで起ったことは、たしかに愉しいことではない。語り手が一心不乱になっている冷酷なまったく思いやりのない簡にして要を得た調子が、しかし我々の目の前にある非劇的な出来事を、こつけないものに変える。

したたかに殴られているにも拘らず、崩解しないのは、このキーンの頭脳それ自体であり、自分自身についての揺るがぬ自惚れであり、自分の力と栄光を確信した自惚れである。日常のつまらぬいざごぎの思い上がった、ゆるがぬ主<sup>あるじ</sup>であるキーンは、しかし戦略家としては、あまりに善良すぎるので、この真実との衝突の勝利者として現われることはない。我々が見て疑いもなく、今しがたキーンにとって完全な敗北のように見えたことが、彼の頭脳の中ではいつも正常な状態に戻り、すぐに驚くべき優越の証明

に変わり、完璧な精神の証明になるのである。

自分こそ夫を追い出したのだと無邪気にも思いこませること、そこに逃走を成功させる秘訣があった。彼はテレゼを住居に閉じこめたのだ。それによって彼は彼女のたくらみから完全に逃れていた。とキーンはテレゼによって住いを追われた後で考えるのである。

キーンの身に起ったこと、彼の精神にかかわる世界は順調であるように思える。しかしそれはキーンの頭のなかの世界にすぎない。その頭のなかでは、彼の一定の偏見に一致するこのような秩序以外は、一切立ち入りを許されない。そして神のように全能な自画像が現われてくる彼の精神世界は、彼が悩んでいる実生活にかかわる割合がだんだん少なくなっていく。彼に固有なものはすべて不安に満ちており、現実に対する不安から生まれた思い上りに添って作られたものである。頭のなかの主観的な世界を目の前の現実から切り離すために、言葉が使われる。どうにもならないことが増々明らかになり、現実を意識から遠ざける幻影が、ひんぱんに現われてくるようになり、キーンが自分の無力を全力を尽して全能だと思い込もうとする。彼の傲慢な精神が世間の愚鈍に反対して戦事体制を敷いている一方で、テレゼの前で目を上げようとしないキーンを、我々は見るのである。この頭脳の世界と現実の世界をつなぐものがここでは存在しない。

人間がどうゆう風に破壊され、無気力の途上でだんだんといかに方向を見失うか、いい気になって一步一步絶対的な優越と権力の妄想に、いかに陥るか、この作品ではそれがよく表われている。

ここではキーンは、困襲的な学者のカリカチュアであり、「従って病的な、精神に障害のある人間でしかない。」<sup>5)</sup> 彼が主を<sup>あるじ</sup>気取ろうとした出来事は彼を無視する。彼が最後に命を失うことになる図書室の火事は狂気のなかにある彼にとって神話の世界の炎上のように思われるのである。

この小説の第2部で、せむしの小人フィッセルレは、寄生虫のようにキーンに依存している。いかさまを使ってキーンから金を巻き上げるが、それを自慢したため泥棒仲間の妬みを買ひ、しかえしを受けてパン切りナイフで背中のこぶを切り離され、虐殺される。そして殺されたフィッセルレが長年の間一緒に暮していた女は、このぞっとする光景の間、のんびりと服を脱いでいた。泥棒仲間は、「死体をベッドの下に押しこんで、やおら女の上に跳び乗った。『だれにも聞れやしなかったぜ』そして笑った。彼は疲れていた。しかし女は申し分なしの肥っちょである。一晚中、楽しんだ」<sup>6)</sup>

ここではこっけいな場面が急に残酷な場面に急変している。カネッティの場合、こっけいな事には、いつも悲惨な事が付随してくるのである。

「この小説では敵だけしか現われず、お互いに文字通り狂気にいたるまで争う。」<sup>7)</sup>

「眩暈」のほとんどすべての登場人物は、高望みをし、自己主張をしており、それゆえに往往にして破滅していく。この主張は各人の苦悩のなかですべての人々によって同時に申し立てられ、そして同時にいつもまた極端にまで押し進められる。ペーター・キーンは彼の図書室の絶対的な支配者であろうとし、テレゼは結婚して手に入れた住居の絶対的な支配者になろうとする。そしてそれぞれ侵入者は死刑に処すると威嚇される。ベネディクト・プファフは暴力で権利を主張し、彼ののぞき穴の世界の絶対的な支配者である。主人公キーンの兄弟であり、この小説の最後に精神病医として現われるゲオルク・キーンは、自分が絶対的な支配者であった場所、精神病院へ帰りたがる。小人のフィッセルレはチェスの世界選手権を夢みており、チェスをする人々すべてを征服しようと思っている。

誰もが本能的な欲求や、のぼせ上った強欲に目かくらんで、それ以外のことを見ようとしなない。そこにこつけいな状況が表われてくる。しかし人間の主体性や自律に対する要求が入れられないときは、また同時にきわめて悲劇的である。キーンが語る「運命を自分の手で操れるのは人間だけだ」という言葉は、ギリシヤ悲劇と似通っている。

ギリシヤの詩人ソフォクレスが紀元400年代に書いた戯曲「オイディプス王」がそれである。主人公のオイディプスは、デルフォイ宮殿を離れたときアポロンより、自分の将来を予言される。それによると、この先いつか自分の生みの父親を殺し、母親と結婚することになるだろうというものであった。その予言に驚いたオイディプスは、それを避けるため父の下を去り旅に出る。その途中で行掛りから一人の老人を殺してしまう。さらに旅を続けた彼は難題に困りはてた一人の王妃を救い、彼女と結ばれるのである。しかしひょんなことから、彼を育てた父は、育ての親であり、殺したのが生みの父親だとわかる。また一緒に暮している妻が実は母親であった。それを知ったオイディプスは、アポロンの神託を嘆き、自分の眼をくりぬいて、二人の娘に手を引かれて、長い永遠の旅に出るのである。

オイディプスは運命として予言された宿命を避けようとする。それによって彼は自分を取り戻すのである。しかし自分に与えられ状況があまりにも複雑であるがゆえに、あらゆる展望を失ってしまう。そして自分の恣意だけが残る。結局彼は体験することになる悲劇的な結末を、盲目的に自分で準備するのである。彼の罪は自分で運命を操ろうとしたことにあった。

「眩暈」の主人公ペーター・キーンも同じように運命を自ら操ろうとする。自主性への要求は、自分の愚かさと他人に対する思いやりのなさによって破局にいたる。登場人物はお互いに利己的であることにより、また不安であることによって、破滅するのである。テレーゼの殺害という幻想の背後に身を隠すキーンの真の罪は全体に現実をそして娶<sup>めあわ</sup>せられた女を正しく判断しないということにあり、宿命のように現実を避けようとするところにある。彼の罪は現実に対する勇気を持たないことにあり、現実で彼の背後で彼の行為や非行為から、何が生じているかを見るためにあえて目を上げようとしなないということにある。何故なら彼が学問への勤めのなかで、あらゆる不慮の事故や日常の世界を徹底的にどんどん小さくしようと試みれば試みるほど、増々現実に対して無力になるからである。抽象への道、普遍的平穩の領域への道、入念な文献による研究によってあらゆる歴史上の伝承から抜き出そうとする永遠の法則の領域への道は、現実喪失への道である。しかしこの現実には彼が退却せねばならないことによって、逆にだんだん大きくなっていく。

ところでこの「眩暈」という小説はその結末が多義であることにも注目する必要があるだろう。キーンが最後に焼死する場面は、キーンに対して罰が与えられると同時に罪の浄化でもある。それは失敗と勝利を表わしている。破壊しつくされた変動のしめくくりであると同時に最後の最高の勝利のしめくくりでもある。他国の神話にもよく通じているキーンは、自分を破滅させる火事を神話の浄罪火のように待ちうけている。炎はあらゆる汚れを焼き払うことができる。

錯乱状態のキーンの目の前で世界は回り始める。そして狂気の渦が彼を悲劇の英雄として炎の渦の中心へ、光のなかへ連れていく。「梯子を部屋の中央に立て、登り、六段目、そこで火を見張り、待った。遂に炎が身体にとりついたとき、その生涯についぞなかったほどの大声で笑いころげた。」<sup>8)</sup>

この作品では話が展開していく内に、人間的なものがすべて、あつという間にぞっとするようなものに、また気違いじみたものに変化する。見慣れたすべてのものの輪郭が、ゆがんでぼやけて行き、グロ

テスクな世界へと変わるのである。

キーンは現実が耐えきれない。意志の力であらゆる努力をしても、現実がもはや離れない悪夢に姿を変えたために彼は追いつめられる。左手の小指を切り落してみても、もはや正気に戻る確信を抱くことはできない。むしろ彼が免れようとする幻覚がそれによってまったく耐えきれなくなる。不安を静めるためには現実全体を断ち切ることが必要なのだ。そして「生の不安は死によって癒す」<sup>9)</sup> ことができるのである。

我々の生きる世界が合理的技術的進歩を遂げたにも拘わらず、一方で破局に至る見込みもあることを考えれば、カネッティのこの小説が表わす比喻を我々は無視することはできないだろう。言い換えれば、我々が世界を文明化し、理性的に統活しようと努めた結果、現在混乱と不安のなかに生きねばならないことを見ればである。我々は戦争の狂気のなかに、すべての人々に対する永続的な爆弾の威嚇のなかに、また環境の公然たる、あるいは静かな破壊のなかに、学問や技術が我々に用意した一般的満足の裏面を知る。この点から「眩暈」はこの破壊し尽す動きの範例的事例のように読みとることも可能である。この小説は今世紀、西欧の理性がめざした自己破壊的錯乱状態の予見的な、そしてはつきり理解できる比喻談である。

被害妄想、パラノイア（偏執病）は権力の病気である。そしてこの病気には狂気の不安があるということ、この小説は迫力あるやり方で明らかにした。キーン博士の恐ろしい物語は、不安の練習として、それが書かれたように読まれねばならないだろう。

我々の目をくらませる破局のイメージとともに、我々の目の前で自らを破壊する登場人物たちの不安は、とりわけキーンの不安は、我々の不安だということが十分感じられるがゆえに、破局のイメージはギリギリとせまってきて、我々を解放しない。そしてそれは浄罪火によってカタルシスを得ようとするように、「眩暈」を終み終ることによって自由を獲得しようと試みる、我々自身の不安なのである。

〔 註 〕

- 1) エリアス・カネッティ：「眩暈」 池内紀訳（法政大学出版局）P. 22
- 2) エリアス・カネッティ：同上 P. 53
- 3) Edgar Piel : "Elias Canetti" (Verlag D. H. Back) S. 27
- 4) エリアス・カネッティ：同上 P. 166~167
- 5) Edgar Piel : ebenda S. 33
- 6) エリアス・カネッティ：同上 P. 391
- 7) Hans Magnus Enzensberger : Elias Canetti 'Die Blendung' in : Der Spiegel Nr. 32/7. 8. 1963 S. 48
- 8) エリアス・カネッティ：同上 P. 505
- 9) Edgar Piel : ebenda S. 37